

グライダー“着陸”

2024年2月13日。大阪市立科学館のグライダーが2004年12月2日からの“長期フライト”から“着陸”しました。そう、館を入った正面に展示していたグライダーの展示が終了し、それに伴って降下させ、分解収納を行ったのです。“離陸”にあたる設置は4日間に渡って行いましたが“着陸”は1日間でした。

さて、20年間におよび展示されていたグライダー、館を訪れると目をひいていたので、ご存じの方も多いかと思います。このグライダーは東北大学学友会航空部より寄贈いただいたもので、ポーランドで製作され、1977年から1999年まで東北大学の学生たちが大空を飛ぶのに使われていたものです。

ところで人が乗り操縦するグライダーの歴史は古く、ライト兄弟の飛行機(1904年)の50年前の1853年に、英国の航空科学者ジョージ・ケーリーが発明しています。これにより人類は翼を使って自由に空を飛ぶ一歩を踏み出しました。そして、動力がある飛行機が一般化した現在でも、グライダーはスポーツとして多くの人を楽しんでいます。今回の降下・分解作業で指導いただいた東北大学航空部の関係者によると国内で数千人がグライダーを楽しんでいるのだそうです。また、スポーツとしてのグライダーは特に東欧で盛んだそうで、ドイツやポーランドなどに複数のメーカーがあるとのことでした。



図2. 翼をはずして収納



図1. グライダー降下作業

ところで、今回降下したことでグライダーを触る機会がありました。両翼15mに対し、重量は260kgと軽量なのは知っていましたが、ベニア板！と羽布！などで作られており、また簡単なピンで接合されており「上昇気流を捕まえると時には高度5000mまで上昇」「数時間も飛びっぱなしのことがある」というのが信じられないような華奢なものでした。見るのと触るのでは大違いです。実物が目の前にある価値を実感しました。

グライダーはまたの機会があるまでは倉庫で大事に収納します。みなさんもぜひ覚えておいてください。

渡部 義弥(科学館学芸員)